



Title	<書評>高安啓介『近代デザインの美学』 みすず書房, 2015年 : 内発的な構成としてのデザインの美学へ
Author(s)	柿木, 伸之
Citation	形象. 2017, 2, p. 102-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75799
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

高安啓介『近代デザインの美学』

「みすず書房、二〇一五年」書評

柿木 伸之

——内発的な構成としてのデザインの美学へ——

現在インフレーションを起こしている——今や人生や「キャリア」もデザインの対象になるそうだ——観のある「デザイン」という語について、建築物や工業製品の形態を、その機能や生産過程を考慮しながら構想し、設計するという本来の意味を省みるならば、そこには、近代の歴史的過程のなかで、いったん分化していた芸術と技術が、生産技術の発展を背景に、新たな仕方で結びついてきた歩みが刻印されている。そして、ある意匠や建築様式が「デザイン」と呼ばれる

とき、その言葉遣いは、二〇世紀初頭における芸術の根本的な変革からの強い影響の下で成立した「近代デザイン」の歴史を想定している。

「デザイン」という語のこのような歴史性を踏まえたいうえで、デザインそのものを、それを織りなす基本的な概念から見つめ直し、「近代デザイン」をその可能性において捉え返す美学、その道筋を描くことによつてこそ、「デザイン」と

いう語を積極的に用いていく地平が切り開かれるのではない。本書『近代デザインの美学』を貫くのは、おそらくこうした問題意識であろう。本書において著者は、「近代デザイン」における「近代」の意味を問い直したうえで、その展開を、近代デザインそのものを形づくる造形、構成、形態、空間、表現、建築、文字という契機から再検討し、さらに近代デザインの美学を、「感性の交通の学」として提示しようとしている。

著者はまず近代デザインを、「歴史様式の否定とともに、表面装飾の排除によつて、新しい生産と生活にかなった事物のありかたを追求しながら、抽象美術につうじる幾何学的形態をとろうとする傾向」と暫定的に定義したうえで、その近代性を二つの流れの合流として捉えている。その一つは、「近代産業における近代化」であり、それは機能と生産の合理性へ向けて、製品や建築物のコンストラクションとしての構成

を追求するものである。もう一つの流れとは、美術の近代化のそれで、そのなかで模倣的描写よりも、コンポジションとしての構成が重視されるようになる。

本書において著者が目指すのは、コンストラクションならびにコンポジションとしての構成の近代的展開を見つめ直すなかから、構成そのものの可能性を取り出すことと言えようが、その際に、近代主義の展開のなかに「形象の否定」が孕まれていることに着目しているのが、本書の最も重要な特徴である。「形象の否定」は、一方で一九一〇年頃の絵画における抽象画の出現や、同時期の音楽における調性の破壊などとして表われるが、他方でそれは、装飾のみならず描画をも排除した建築や工業デザインとしてみならず、徹底したタイポグラフィとしても表われているという。それは「形象の制作にかかわりながら、形象の否定をはらむもの」なのである。

著者によると、近代タイポグラフィを特徴づけるのは、左右対称の文字組みからの解放であり、それは同時代の音楽における主調という中心からの解放と対をなす。無調音楽が脱中心的に作曲、すなわちコンポジションの可能性を拡げていくと呼応するかのようにして、近代タイポグラフィは、これ

もコンポジションである組版の多様な可能性を、脱中心的に試みるようになっていくのである。その動きは、タイポグラフィを越えて、リベスキンドの「建築アルファベット」の試みにも通じていよう。彼は、ユダヤ博物館の建築に、「偶像の禁止」の戒律に應える文字的な表現を導入することで、そこにシヨアーのような表象不可能な出来事を、そのような出来事として想起する場を開こうとしたのだ。

ただし、そのような「形象の否定」を通過したデザインの試みの構成原理が、素材に外から一定の形式を当てはめ、素材を支配するものであり続けるなら、近代の科学技術に内在する自然支配を、人間の生活の内部により深く浸透させるだけだろう。こうした支配の暴力によって貫かれた構成に、著者は「内からの構成」を対置させ、その道筋を模索する試みを、近代の芸術運動の内部に見届けている。そこに、近代デザインをその可能性において再考する、最も重要な切り口があるにちがいない。著者によると、例えばクレーの造形理論は、線や色彩といった要素がおのずと組み合わさり、植物が生長するように形態が形成される過程——それを表わすのに、フォルムンクの語を用いているという——に着目している。それをつうじてクレーは、「支配をとまなわぬ、諸

要素の内からの構成」を目指したのである。

この「内からの構成」を、近代デザインの可能性として理論的に提示するために、著者は美学そのものを、「感性の交通の学」として再定義しようとする。この「感性の交通の学」において、「交通」とはコミュニケーションのことであり、それは何よりもまず、生きた形式を織りなす部分どうしとの相互関係である。それが内発的な相互作用として生じ、一つの形態を現出させるならば、この形態のうちにさらにもう一つの交通が生まれているという。それは、アドルノが語った「外部との交通の断絶」による「外部との交通」にはかならない。作品が自己の内発的な論理を貫くとき、作品は一個のモナドとして、社会の総体を映し出すのだ。

とりわけ、部分どうしの相互作用によって、形態のうちにそれ自身の秩序が内側から生み出されているとき、その生きた形式が、理想的な社会の姿を暗示している。デザインの美質を享受する者は、そこから、自分が生きる社会において複数を肯定する可能性を深く感じ取ることができよう。本書の末尾では、その可能性へ向けて、交通のあり方を省察し、デザインの生きた形式を産み出す交通の回路を理論的に切り開くことが、「感性の交通の学」としての美学の課題として

提示されているが、その際、素材と形式の相互的な関わりのうちにある模倣——それはアドルノが論じたミメーシスとも通底していよう——の感性的な交通を掘り下げることが重要であろう。それによって、近代デザインそのものを形づくっている芸術と技術の関係も見直されるにちがいない。本書は、このように美的かつ感性的な交通を見直し、そこから生じている関係を風通しよく捉え返していく「感性の交通の学」の礎石であると同時に、近代デザインへの透徹した省察にもとづくこの新たな美学への誘いでもある。